

女性をめぐる性役割の葛藤処理法の変遷

—— 1950年代から1980年代の主婦論争に焦点を当てて ——

妙木 忍

本論文の目的は、主婦の立場の変遷と女性をめぐる社会史的背景をふまえて、女性がいかなる葛藤を抱いてきたのか、またその解決をどのように図ろうとしてきたのかを、考究することである。分析の素材に選んだのは、戦後3次にわたる「主婦論争」と1980年代の「アグネス論争」である。1975年以降働く女性が増加したが、新たに、職業的役割と既存の性役割とのあいだに葛藤が生じてきた。言説分析をおこなうことにより、性役割に起因する葛藤とその解決法の模索を「主婦論争」がまさに反映していることを論じ、さらにその変遷を明らかにする。

1 はじめに

1-1 問題の所在

本稿の目的は、女性をめぐる社会史の変遷および、その結果としての主婦の立場の変遷をふまえて、女性がいかなる葛藤を抱いてきたのか、また、その解決をどのように図ろうとしてきたのかを考察することである¹。

家族の戦後体制（「サラリーマン＝専業主婦」体制）にともなってあらわれた「主婦」という立場や身分をめぐる論争は、1950年代にまでさかのぼることができる。これら女性の立場や身分をめぐる論争は、時代や論点の変容を遂げながらも現代に引き継がれている。これらの論争こそ、女性が抱く葛藤を反映し、その解決策を女性がいかに模索したかを如実に物語るものであろう（詳しくは後述する）。

本稿が分析の素材に選んだのは、戦後3次にわたる「主婦論争」と「アグネス論争」である。既存の「主婦論争」研究（上野千鶴子1982a,b、駒野陽子[1976]1982、神田道子

[1974]1982など）でよく知られているように、戦後の「主婦論争」には次のような歴史がある。1950年代の第1次主婦論争（1955-1959、主婦の職場進出の是非をめぐる論争）、1960年代の第2次主婦論争（1960-1961、家事労働の経済的価値をめぐる論争）、1970年代の第3次主婦論争（1972、主婦の立場の正当性をめぐる論争）である²。また第2節3項で詳述するように、戦後30年間下がり続けた女子労働力率は1975年上昇傾向に転じ、働く女性が増加してきた。この社会史的背景のもとで1980年代に起きた論争が「アグネス論争」である。

「アグネス論争」（1987-88）とは、1986年11月に生まれた長男和平君を、香港出身の歌手アグネス・チャンが楽屋に連れてきたことが発端となっておきた論争である³。芸能界の大先輩・淡谷のり子の、「芸を売る商売に子どもを連れてきては所帯じみてよくない」という苦言に始まり、林真理子や中野翠らもアグネスの行為を甘えであると批判した。そこにフェミニストの論客が介入したことにより、論争は「子

連れ出勤をめぐる是非」に発展、一般の女性にとっても身近な問題として論争は大いに盛り上がった。別名「子連れ出勤論争」とも呼ばれる「アグネス論争」は、働く母親の増加を背景に、仕事と子育てのジレンマを具現化した論争としても意味を持っている。「働く母親の子連れ出勤」の観点から見れば、「アグネス論争」も広義の「(働く)主婦論争」としてとらえることが可能であろう(後述)。

以上の素材をもとにして、女性がどのような時代にどのような葛藤を抱えてきたのか、またその解決をどのように試みたのかを論じていくことにしたい。この研究がなされれば、1990年代の専業主婦批判とその擁護(「第4次主婦論争」とも呼ばれている)や、2000年代の「負け犬論争」にも示唆を与えるであろう⁴。また、女性が抱く葛藤を通時的に考究することによってその原因を明らかにし、解決の手がかりを得る第一歩としたい。

1-2 本稿の構成

本稿は5節から成っている。第1節では、本稿の問題の所在を明らかにした。第2節では、「主婦」という概念についての考察をおこなうとともに、「主婦論争」や「アグネス論争」が起きた時代の社会的背景との対応関係を論じる(文脈化の作業をおこなう)。第3節では、分析の対象とその選定方法について説明し、「主婦論争」と「アグネス論争」の特徴を概観する。第4節では、先行研究の批判的検討をおこなうとともに、役割葛藤の概念を用いて分析を加えていく。第5節では、本稿の概括および、本稿の意義と今後の展望について論じることにしたい。

2 主婦論争の成立—社会的背景との対応—

2-1 「主婦」という概念をめぐる

主婦論争を論じるにあたって、「主婦」という概念について考えてみたい。むらき数子(1977: 74)によると、明治末年までは未婚者を含む女あるじの意味であった。しかし、大正時代に入って家族国家観が確立するにつれて、「全階層の家族に<家長権>が確立され、家長に対応して一家の中心になる女性に<主婦>という名が与えられた」という⁵。『広辞苑』によれば、「主婦権」とは「主婦がにぎっている家政管理権」であり「かなり強い伝統的な権利」である。民俗学では主婦権は「しゃもじ」に象徴され、前代の主婦(旧主婦)が、次代の主婦になる長男の嫁に主婦権を譲り渡すことを「ヘラ渡し」「シャクシ渡し」という(瀬川清子 1979: 106, 吉見周子担当、秋庭隆編 [1986]1995: 701)。というも、「食事の配分」が主婦のいちばん重い権限であったからである。

上野([1991]2000: 168)によれば、主婦であるための資格は「家長の妻であること、した働きの『女子衆』や親族の女性を配下に従え、それに采配をふるう家政の指揮監督権を握っていること」であるという。ところが近代家族の成立(後述)とともに核家族化が進み、上野([1991]2000: 168-9)や瀬地山角(1996: 51)が指摘するように、家族の中で唯一の成人女性であり家庭内で唯一の家事担当者としての「主婦」が成立したのである⁶。本稿で「主婦」を表す場合、それは家庭内で唯一の、主たる家事担当者を指している⁷。

2-2 家族の戦後体制

では、そのような「主婦」を生み出した「家族の戦後体制」について考えてみることにし

よう。高度成長といえば、1955年から73年にかけての日本の急激な経済成長を指しているが、この時期は女子労働力率が1960年54.5%、1965年50.6%、1975年45.7%と戦後30年間下がり続けた時期に重なっている⁸。「戦後、女性はずまず主婦になった」(落合恵美子[1994]2001: 101)といわれているように、女性は「結婚したら主婦になること」が規範とされる時代が到来した。高度成長が「サラリーマン=専業主婦」体制という新しい体制をもたらしたのである。落合恵美子は「家族の戦後体制」の特徴を次の三点——「女性の主婦化」「再生産平等主義」(皆が適齢期に結婚し、こどもが二、三人いる家族を作るといふこと)「人口学的移行世代が担い手」(落合[1994]2001: 101)——にまとめている。移行世代(1925年～50年生まれの多産少死の世代)は人口が多く、この人口学的条件こそが高度成長を可能にし(落合[1994]2001: 88)、家族の戦後体制をもたらした⁹。

戦後日本における「主婦」の誕生には何が必要であったか——それは職場と家庭の分離(公私の分離)とそれへの性別による対応である。アン・オークレーが『『主婦とは何か』』という問いは、すぐれて産業化社会に関係する問いである(Oakley 1974=1986: 16)と述べているように、産業化の急速な進展とともに「新中間層」と呼ばれる会社員、教師、官吏などの俸給生活者(管理的知的作業などに従うホワイトカラー)が増加し、職場と家庭は分離され、主婦は夫を仕事に送り出し、家にとどまるようになった。駒野([1976] 1982: 234)によれば、「性別役割の思想が日本に定着し、新しい主婦の時代が到来したのは、太平洋戦争後、民法が改正され、夫婦中心の核家族が増加した昭和30年代である」という。したがって第1次主婦論争にみられるように、性別役割分担意識が定着す

ると同時に主婦役割への疑問も提出され始め、それが「主婦論争」の契機となったといえる。

たとえば、むらき数子(1977: 75)は戦後の主婦が抱く「主婦であることの不安」として次の二点——「近代家族における妻の役割のあいまいさに基づく不安」と「妻の身分が夫の愛情と経済力とに依存していることに対する不安」——を挙げ、戦後の主婦の状況を考える上で「主婦論争」を「格好の材料」とする。これは主婦という役割が「たいして魅力に富んだものではない」として主婦役割への疑問を提出した石垣綾子論文(第1次主婦論争)や「なぜ家事労働は価値を生まないのか」という無償の主婦役割や家事労働にたいする疑問を提出した磯野富士子論文(第2次主婦論争)に垣間見ることができる。

井上輝子(1995: 18)は、「性別役割分業を廃止するための戦略」として、「市場労働への女性参加を推進する道」と「女性役割とされてきた家事労働に積極的な評価付けをする道」という「方向性の相反する二つの道」を挙げている。そしてこれらをめぐる幾多の論争として、3次にわたって繰り返された「主婦論争」を挙げるのである。

2-3 主婦論争の転換点

とはいえ、戦後「主婦」をめぐる論争には決定的な転換点がある。それは、「主婦」の自明性が崩れる以前と以降という社会史的な区分である。1975年に戦後30年間下がり続けた女子労働力率が上昇傾向に転じたことや、1983年に専業主婦世帯が共働き世帯を下回ったという歴史的出来事を一つの指標にすることができる¹⁰。戦後「主婦」をめぐる論争は、社会史的变化による「主婦」の立場の変遷と歩調をとみにしている。すなわち、第1次・第2次主婦論

争は女性が結婚したら「主婦」になることが前提で繰り広げられた論争であるのに対し、第3次主婦論争は「主婦」の自明性喪失を目前にして、「主婦」という立場のゆらぎを象徴するような論争であった¹¹。とはいえ、これらはいずれも「主婦」という女性の立場からの距離を測りつつ批判や評価を加えるものであった。

それに対し、「アグネス論争」は、「主婦」という立場からは離れ、「働く女性」のあり方をめぐる論争へと論争の軸が移行した。にもかかわらず、「アグネス論争」を、戦後「主婦」をめぐる論争の一つに位置付けうる、と述べる理由は次の通りである。

「アグネス論争」(1987-88)とは、女性の職場進出と働く母親の増加を背景に、子連れ出勤の是非や仕事と子育ての両立問題が取り上げられた論争である。男女雇用機会均等法(1985年5月成立)と育児休業法(1991年5月成立)のあいだに起こった論争であることから分かるように、「主婦」であることは「あたりまえ」でなくなり、「主婦」になることが一つの選択肢に過ぎなくなった時期の論争である¹²。しかしながら、「主婦」になることが「あたりまえ」でなくなった後の論争においても「家事労働は女性が担うものである」という規範は存在し続けている。なぜならば、「アグネス論争」において、仕事をするなら職場に子育てを持ち込むべきではない、すなわち、仕事をするなら「男並み」という「公私の分離」規範が依然としてみられるからである¹³。それは働く女性の増加にもかかわらず、従来の「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分担から女性が自由になっていないことを意味している。実際それは、「男性は仕事、女性は家庭も仕事も」という二重の負担が女性に課せられていたことにも明らかである¹⁴。「アグネス論争」はまさにそのよ

うな風潮のなかで起こった論争であり、働く女性が直面した問題を具現化した論争としても意味を持っている。このように、(公的とされる)職場に(私的かつ女性の役割とされる)子育てを持ち込むべきか否か、という子連れ出勤の是非をめぐる「アグネス論争」は、実は「主婦」という規範にも大きくかかわっており、1980年代に女性が直面した問題を象徴するような論争であった。したがって、「アグネス論争」を広義の「(働く)主婦論争」として位置付けることは可能であり、それは、戦後「主婦論争」の文脈の中で読み解かれる意義を十分に持っている。

3 対象の設定

3-1 分析対象の選定方法

第1次主婦論争については、上野(1982a)に再録されている17資料を、第2次主婦論争については上野(1982b)に再録されている9資料に加えて、『週刊読書人』『婦人民主新聞』『アカハタ』など19資料を、第3次主婦論争については、上野(1982b)に再録されている5資料を分析の対象とした。これらの「主婦論争」は、資料集や先行研究が豊富であるのに対し、「アグネス論争」は体系的に論じられていない。そこで本稿では、「アグネス論争」の資料を網羅性が極めて高くなるように収集をおこなった。すなわち、「アグネス論争」に関する雑誌・新聞の言説資料(雑誌148資料と新聞115資料、合計263資料)を収集・分析した¹⁵。

3-2 言説分析から得られた知見

これらの論争の精緻な言説分析(妙木忍2004)においては、時代や論点の変容を遂げながらも繰り返される女性間の対立と葛藤の仕組

みを明らかにするべく、「何が論じられて何が論じられなかったのか」という言説の出現と消失に注目した。そのなかでもとりわけ、問う価値があったにもかかわらず問われなかった問題や、登場してもそれ以上は発展しなかった論点を考察した。そこで明らかになったことは、性別役割規範をめぐる女性間の対立と葛藤においては、性別役割分担そのものを問題化する論点が排除されているということであった。これは、各論争で排除された個別論点は様々であっても、「なぜ女性だけに『主婦』という性別役割が与えられるのか」という問いが共通して問われない（性別役割分担そのものを問題化する方向に視点が及ばない）ことを浮き彫りにした（第3節3項の表1④「排除された論点」参照）。

上記の知見が1970年代後半の女性学創出期における「主婦論争」研究と画期的に異なる点は、(1) 既存の研究が、(主婦論争において)「何が論じられたか」を主に分析しているのに対し、上記言説分析は、「何が論じられて何が論じられなかったのか」を分析している点、(2) 特に「何が論じられなかったのか」に上記言説分析が焦点を当てたことにより、女性の身分や立場をめぐる論争における共通点（性別役割分担そのものを問題化する論点の排除）を明らかにし、(3) 女性間の対立と葛藤が時代や論点の変容を遂げながらも繰り返される理由を説明した点である。さらに(4) 上記(2)の知見が実は、「サラリーマン＝専業主婦」体制における3次にわたる「主婦論争」のみならず、専業主婦になることが一つの選択肢に過ぎなくなった時代の「アグネス論争」(1987-88)にも当てはまることを明らかにした点、(5) 上記分析を通じて、女性間の対立と葛藤が成立する仕組みを通時的に分析する視点を得て、先行研究や資料集の蓄積はほとんどなかった1980年代以降の論争の研究

に、従来にない視覚を切り開いた点である。

次項で表1「『主婦論争』と『アグネス論争』の特徴」を提示するのは、上記の知見（特に「何が論じられなかったのか」）を、統計データや各論争の論点とともに分かりやすく示すためである。さらには、その分析から一歩踏み込み、本稿の分析に入る手がかりを得るためである。

3-3 「主婦論争」と「アグネス論争」の特徴

第2節3項で論じ、下記の表1でも示すように、1975年に女子労働力率が上昇傾向に転じたことなどから、3次にわたる「主婦論争」と「アグネス論争」とでは様相を異にする。

第1次・第2次主婦論争の時期は「仕事か家庭か」という二者択一が迫られ、第3次主婦論争の時期は「仕事か家庭か」から「仕事も家庭も」への移行期と考えられるが、いずれにしても「仕事か家庭か」という二者択一の論点が存在していた¹⁶。

第1次主婦論争において「主婦」という生き方が擁護されたり、第2次主婦論争において家事労働は価値を生むのではないかと問うことによって「主婦」の地位の向上を唱えたり、第3次主婦論争において「主婦」こそが人間らしい生活を送っているという論が出てきた背景には、「主婦」という大きなキーワードが規範として前提とされていた。それに対し、「アグネス論争」の時期には、「主婦になること」は一つの選択肢に過ぎなくなっていたのである。このようなライフコース規範の変容を読み取りながら、各論争の特徴を表にしてみよう。表1は、それぞれの論争の特徴を示すだけでなく、相違点や類似点も読み取れるように工夫している。

表1（次頁）のなかでも特に、⑨「論争契機は何に対する疑問・抵抗か」は注目されてよい。なぜならば、論争の契機こそが各時代に女性が

表 1:「主婦論争」と「アグネス論争」の特徴

論争名	第 1 次主婦論争	第 2 次主婦論争	第 3 次主婦論争	アグネス論争
時期	1955-1959	1960-1961	1972	1987-1988
①女子労働力率	56.7%(1955)	54.5%(1960)	47.7%	48.6%(1987)
②専業主婦世帯	増加	増加	(増加)	減少
③専業主婦の自明性	有	有	(過渡期)	無
④仕事と家庭の意識の推移	仕事か家庭か	仕事か家庭か	(過渡期)	仕事も家庭も 「～したい」
	「～すべき」	「～すべき」		
⑤論争の前提	女性が結婚したら主婦になること		————	結婚後も働くこと
⑥前提④内の規範	女性が結婚したら主婦になること		————	男並みに働くこと
⑦論争のきっかけ	石垣綾子「主婦という第二職業論」 1955.2.	磯野富士子「婦人解放論の混迷」 1960.4.10.	武田京子「主婦こそ解放された人間像」 1972.4.	アグネス・チャン 楽屋への子連れ出勤 1987.3.
⑧その主張・論点	主婦の職場進出を勧めた	主婦労働の経済的価値を問う	主婦の生活こそ人間的である	仕事時も母親である
⑨論争契機は何に対する疑問・抵抗か	主婦役割への疑問	無給の主婦役割・家事労働への疑問	従来的女性解放論の限界	役割葛藤への疑問(抵抗)
⑩賛否などの反響	①職場進出論 ②家庭擁護論 ③主婦運動論 ④主婦役割否定	①家事労働価値説 ②同・無価値説 ③主婦年金制など ④低賃金構造助長	①主婦は解放されている ②主婦は解放されていない	働く女性の子連れ出勤に論点を限定 ①「甘え」批判 ②アグネス支持
⑪上記⑤の支持言説	家庭擁護論	家事労働価値説	————	職場神聖論
⑫女性の分断	働く主婦と専業主婦の差異化	働く主婦と専業主婦の差異化	主婦と主婦でない女性の差異化	「公私の分離」に同調する女性と抵触する女性の差異化
⑬論争の弱点	「主婦解体」に至らず (主婦解体は富岡多恵子 1984 の用語)		「女＝主婦」の構図を抜け出せなかったこと	役割葛藤の背景や原因の解明に向かわず
⑭排除された論点 注:「二重の負担」とは仕事と家庭(育児)の二重負担を意味する。	①女性一般の職場進出について(上野 1982b) ②なぜ女性だけが二重の負担を担うのか ③なぜ女性だけが主婦役割を担うのか	①家事労働と主婦労働の相違 ②なぜ女性が、しかももっぱら女性のみが家事労働を担うのか	①なぜ女性だけが「主婦」になり、男性は「主夫」にならないのか(池田祥子 1991) ②なぜ女性だけが二重の負担を担うのか	①なぜ女性だけが「男並み」の職業的役割と家庭での役割を担わなければならないのか ②相矛盾する役割期待と、それによって生じる役割葛藤の存在
	なぜ女性だけに「主婦」という性役割が与えられるのか			

抱いた葛藤を反映していると考えられるからである。⑨の記載からは、第1次主婦論争は「主婦役割への疑問」、第2次主婦論争は「無給の主婦役割・家事労働への疑問」、第3次主婦論争は「従来の女性解放論の限界」（「仕事か家庭か」という二者択一的な既存の論争への疑問）が論争のきっかけとなっていることが分かる。ここには、「主婦」というキーワードがある。

一方、「アグネス論争」の契機は、「役割葛藤への疑問（抵抗）」である。これは、働く女性の増加にともない、職場で求められる男性的役割と家庭で求められる女性的役割という二つの役割期待のあいだでジレンマを起し、役割葛藤を抱く女性が増加した象徴的なあらわれであろう。この論点は、以下の第4節2項および第4節3項にも深くかかわっているので、後に検討しよう。

4 性役割をめぐる役割葛藤

4-1 性役割論と役割葛藤

本稿で重要となる「性役割」や「役割葛藤」の概念について説明するために、女性学の貢献を簡単にふりかえっておこう。女性学における「性役割」の概念の普及は、「男の役割、女の役割とされているものは、生理的に定められた動かしがたいものではなく、社会が男女という地位にそれぞれ割り振ったものである」（井上1995: 2）という認識を定着させた。また性役割論は、江原由美子（[1995]2000: 52）が指摘しているように、「生物学的性別論を脱却する上で重要」な役割を果たし、「女性のパーソナリティ形成を性役割の社会化という観点から考察することによって、現代女性のアイデンティティ形成の困難さや役割葛藤を明らかにした点で有意義」であった¹⁷。このように女性学は、女性の抱く

葛藤の存在を明らかにすることで性役割に内在する問題点を明確にしようとしたのである。その性役割研究の蓄積として、江原（[1996]2000: 22-3）は次の三点を指摘する。①性役割が矛盾を含んでいること、②それにもかかわらず性役割が社会的に維持・強化されていること、③ゆえに性役割を維持・強化している社会構造や支配構造が存在すると考えられること、である。「主婦・働く女性・母親・少女など多様な女性の性役割をめぐる葛藤があり、それらの葛藤は女性の心身に大きな影響を与え、また「それらの葛藤を乗り越えるためにさまざまな女性がさまざまな形で模索していること」が明らかにされている（江原 [1996]2000: 22）¹⁸。

本稿では、性役割研究によって明らかにされた役割葛藤の概念を批判的に継承し、「主婦論争」と「アグネス論争」の文脈で具体的な検討をおこなう。本稿で採用する定義は次のとおりである。「性役割」については「社会的・文化的につくられた、性に付随させた役割」（『岩波女性学事典』目黒依子担当、井上ほか編2002: 289）、「役割葛藤」については、職場で求められる男性的役割と家庭で求められる女性的役割という相矛盾する役割期待に起因する心的葛藤のこととする。

4-2 3種類の役割葛藤処理法

家庭人としての女性に求められる性役割内部での矛盾に加えて、井上（1976: 81）が指摘するように、職業をもつ女性は「職業生活と家庭生活の矛盾、さらには職業の要請する役割と女性としての性役割との間で、自己を引きさかれ」る。そこで井上（1976: 81）は、このような役割葛藤を女性たちがどのように解決しているのかという問いを提示する¹⁹。

井上（1976: 8）は、日本女性における性役割

と政治的役割との間の葛藤処理の3類型「伝統化型」「使い分け型」「統合型」を明示したスーザン・ファーの研究に言及し、それが「職業的役割と女性の性役割との葛藤に関しても同様の処理方法が適用される」と述べている²⁰。本稿では、この立場を批判的に継承する。下記は、井上(1976: 8)による具体的説明(脚注20に記載)を参考に、筆者が性役割と職業的役割の葛藤処理方針に適用し直し、各類型を定義したものである。

(1)「伝統化型」は、職業的役割は男性に任せ、自身は家庭での家事労働や育児に専念する／伝統的な女性役割を担うことによって、社会的役割を果たそうとするタイプである。ただし、妻役割や母親役割のみを担うことによる、「主婦」という立場への疑問が残る。(2)「使い分け型」は、仕事の間では自覚と責任を持って仕事をこなす、そこでは家庭や子どもの存在を感じさせないが、家庭では母親や妻の役割を演じるタイプである。ただし、相矛盾する役割期待を自ら受け入れることによって、引き裂かれた自己を自ら演じることになる。(3)「統合型」は、伝統的な性役割や婚姻制度を受け入れないタイプである。ただし、周囲との緊張の可能性がある。

しかしこれら3類型は、さらに踏み込んで検討することが必要である。注意を要する点は、(1)「伝統化型」の場合、職業を選択せず婚姻をしている場合であり、家庭で女性に求められる性役割内部での矛盾が出てくるということである。それに対し(2)「使い分け型」は、職業と婚姻の両方を選択しており、職場で求められる男性的役割と家庭で求められる女性的役割を完全に使い分ける処理法であり、役割葛藤(性役割と職業的役割の間の矛盾)の可能性が出てくる。(3)「統合型」は、職場で求められる男性的役割を、私生活にも貫徹し、伝統的な性役

割や婚姻制度を受け入れないというものである。性役割内部での矛盾や役割葛藤がない代わりに、周囲との緊張の可能性が生まれるというものである。

以上、「伝統化型」「使い分け型」「統合型」の類型を用いて、次項で具体的な検討に入りたい。

4-3 性役割をめぐる葛藤処理法の変遷

井上(1976: 8)は、「伝統化型」「使い分け型」「統合型」のいずれのタイプをとってみても、「女性の役割葛藤が十分に処理されるとはいいがたい」と述べている。女性の立場や身分をめぐる論争が時代や論点の変容を遂げながらも何度も繰り返される一因に、このことがまさにかかわっていると筆者は考えている。また、各時代に、いくつかのタイプの葛藤処理法が共存するはずであるにもかかわらず、特定の時代に特定の葛藤処理法に関する論点が問題化されるのは、当該時代の社会史的な文脈との対応関係があるであろうと筆者は考えている²¹。それでは第1次主婦論争から順に検討してみよう。

女性の主婦化が進行した1950年代以降、家電製品も急速に普及し、それを買うために女性たちはパート労働に出るようになった²²。そのような中で、主婦という役割が「たいして魅力に富んだものではない」として石垣綾子が主婦役割への疑問を提出し(第1次主婦論争)、やがて、主婦でもあり労働者でもあるという女性の二重役割が定着してくると生産にかかわる労働が経済的価値を持ち、家庭における労働が経済的価値を持たないことへの疑問が生じてきたのである(第2次主婦論争)²³。これらは、「伝統化型」の葛藤処理法を試してみても性役割内部での矛盾が解決できなかったからこそ主婦役割への疑問としてこの時期に登場したと解釈できる。第3次主婦論争は、主婦の立場の正当性

を主張した主婦礼賛論から始まっており特殊である。主婦というライフコース規範の自明性喪失を目前にして、その正当性を問い、「伝統化型」に徹するという葛藤処理法をあえて肯定・宣言しようと試みたものであり、やはり「伝統化型」が言説のなかに登場している。

一方「アグネス論争」の時期は、すでに述べたように、女性の生き方が「仕事も家庭も」「あれもこれも」「～したい」に移行してきた時期であった。結婚や出産後も仕事を続ける女性が増加し、その文脈においての仕事と家庭、もしくは仕事と育児の二重負担が女性の肩にかかっていたのである。その意味において、「アグネス論争」の分析と関係があるのは「使い分け型」である²⁴。アグネスの子連れ出勤は、「使い分け型」に付随する役割葛藤に対する抵抗と読み解くことが妥当であろう²⁵。

「アグネス論争」当時、ライフコース比較言説が登場したことは注目されてよい（263記事中19記事）。なぜなら、次に示すように、これは働く主婦の問題に焦点が移行したことを表す指標となるからである。「百恵型」（結婚と同時に仕事をやめて専業主婦になるタイプ）、「聖子型」（結婚しても仕事を継続し、出産後は育児休業をとり、仕事と育児を切り離して仕事に復帰するタイプ）、「アグネス型」（結婚と出産をしても、仕事も子育ても同時にこなすタイプ）などと名称が付けられ、特に「聖子型」と「アグネス型」が頻繁に比較され、前者が賞賛の対象となり後者が批判の対象となったことも注目に値する²⁶。なぜならば、「使い分け型」の典型である「聖子型」が賞賛され、それを守らなかったアグネスが批判されるのは、それだけ「使い分け型」による役割葛藤が大きかったと考えられるからである。

なぜ役割葛藤が大きければアグネスが批判の

対象になるのか、その理由を具体的に述べてみよう。子連れ出勤をおこなったアグネスは、仕事のために家庭や子育てを犠牲にしてきた母親や、働きたくても子育てのために仕事をあきらめざるを得なかった母親の双方から批判されたが、それは、アグネスの状況と自分の状況とを比較した上での相対的な不満感に起因するものであると考えられる。上記双方からの批判を「相対的剥奪」と分析したのは上野(2003)であるが、本稿もその立場をとる²⁷。「使い分け型」賞賛の背景には、このような（自らが抱いている）葛藤と（アグネスの境遇との）比較の上での不満感があったと分析できる²⁸。それゆえ「使い分け型」が賞賛されたとしても、それは女性が役割葛藤を抱いていたからこそである、と解釈できる。

以上のように、1950年代、1960年代に主婦役割への疑問が提出されたこと、および、1970年代を移行期として1980年代に役割葛藤の問題を象徴的にあらわす「アグネス論争」が起こったことを考察してみると、言説内の論点と関わる葛藤処理法が、「伝統化型」から「使い分け型」に移行したことがうかがえる。「サラリーマン＝専業主婦」体制における「主婦」の場合は性役割内部での矛盾を、職場進出をした場合は、家庭での性役割と職場での職業的役割を担わされ、あるいは女性自らがそれを担い、その結果、葛藤が生じていたと考えられる²⁹。

戦後「主婦論争」の歩みは、女性をめぐる社会的変遷と、その結果としての主婦の立場の変遷と歩みをともにしていると同時に、性役割をめぐる葛藤処理法の変遷も映し出していると考えられる。それは、女性間の対立と葛藤が生じる仕組み（性別役割分担そのものを問題化する論点の排除）を共通の特徴としているにもかかわらず、また、複数の葛藤処理法が共存しうるにもかかわらず

ず、その時代の文脈に応じて、言説のなかで問題化される葛藤処理法と問題化されない葛藤処理法があることから読み取れる。

しかしここで重要になるのは、どの時代にもどのような葛藤処理法があり、それがどのような形で女性間の対立と葛藤のなかであらわれているのか、という具体的検討である。これをおこなえば、井上(1976: 8)が(いずれのタイプをとってみても)「女性の役割葛藤が十分に処理されるとはいいがたい」と述べている点を、踏み込んで検討できる。

筆者は井上(1976: 8)の論点が、女性間の対立と葛藤が繰り返される一因であると考えているが(前述)、これは次のことと深く関連している。すなわち、論争に共通する、性別役割分担そのものを問題化する論点の排除である。これは女性が抱く葛藤を解決から遠ざける原因となる。「なぜ女性だけに『主婦』という性役割が与えられるのか」という論点が問われない限り、女性間の対立と葛藤は繰り返されるであろう。戦後における女性の立場や身分をめぐる論争の通時的分析は、その解決に向けてのヒントを与えてくれている。

5 おわりに

5-1 概観

本稿では、1950年代から1980年代の「主婦論争」の言説分析に「役割葛藤」の概念を用いて、性別役割をめぐる葛藤処理法の変遷を考察してきた。女性学の性別役割研究により役割葛藤の存在が明らかにされたが、本稿では、それをより具体的に検討してきた。スーザン・ファーと井上輝子の知見から、性別役割と職業的役割の葛藤処理方針を類型化し、それを批判的に継承し、社会史的な文脈と言説の変容から葛藤処理

法の変遷を考察した。

その結果、第1次主婦論争、第2次主婦論争においては性別役割内部での矛盾があらわれており(「伝統化型」による矛盾)、第3次主婦論争(「伝統化型」の強い肯定)を移行期として、アグネス論争においては役割葛藤の萌芽的な表れが読み取れた(「使い分け型」による矛盾)。一方で、これらの論争には「性別役割分担そのものを問題化する論点」(「なぜ女性だけに「主婦」という性別役割が与えられるのか」という問い)が排除されている、という共通点があった。

女性間の対立と葛藤が生じる仕組みには、性別役割分担そのものを問題化する論点の排除が関与していると考えられるが、個別の論点の変容を追うと、葛藤処理法については「伝統化型」に関する論点から「使い分け型」に関する論点に移行していた。これは女性をめぐる社会史的な文脈とも対応しているものであった。ここで読み取れたのは、時代の文脈に応じて、性別役割内部での矛盾を焦点化した論争が起きたり、役割葛藤による矛盾に起因する論争が起きたりするという、女性が新たな解決法を模索しているという試みである。

役割葛藤の存在を指摘するだけでなく、それを戦後「主婦論争」の言説の変容とともに考察することによって、以上のことが明らかになった。

5-2 本稿の意義と今後の展望

本稿の意義は、女性が抱く葛藤の存在とその種類が時代の変遷とともにどのように変化をみせてきたのか、また、女性たちがその解決法をどのように試みたのか、ということを考究したことにある。特に、主婦になることがライフコース規範とされた1950年代から1970年代にかけて、主婦になることが一つの選択肢に過ぎな

くなった1980年代の論争を併せて考察したところに意味がある。1980年代は働く女性が増加し始めたところであり、「アグネス論争」は、当時の女性が抱いていた仕事と育児の両立問題を浮き彫りにした重要な論争である。その分析も含めてできたことは、意義のあるものであろう。

今後の展望は、1990年代の「第4次主婦論争」、2000年代の「負け犬論争」の分析をおこない、戦後1950年代から2000年代までの50年以上のタイムスパンの論争を言説分析することである。ここでも、「何が論じられて何が論じられなかったのか」という分析視点を導入したい。時代や論点の変容とともに移り変わる点を分析することはもちろんのこと、論じられないことに共通点があるとすればそれも明らかにしたいと考えている。

また、言説の出現や消失を明らかにするだけでなく、そのような現象が生じる背景にあるものを考察し、当該時代の女性をめぐる社会史的背景との対応を考えていくことが重要になると思われる。その際に論争契機を考えることは有効な方法であり、論争契機に性役割をめぐる葛藤がかかわっているのではないか、という問いを立てることもできる（本稿ではこの立場にたって分析を進めてきた）。

上記視点は、「アグネス論争」以降現在にいたるまでの女性間の対立と葛藤にどのような示唆を与えるだろうか。1990年代以降の論争における予見を少し述べておこう。「第4次主婦論争」における専業主婦批判と擁護の対立は、「もはやマイノリティとなった専業主婦を擁護する保守派の議論として登場」（上野千鶴子担当、井上ほか編2002: 196）とされているが、さらに次のような解釈もできる。働く女性がますます増加し、(1) 専業主婦優遇政策のあり方が問い直されるようになったこと、(2) 社会学

者らによる専業主婦の歴史的役割が終わったとする論の登場、である³⁰。このような点を踏まえてさらなる検討が必要である。

「負け犬論争」における議論は、伝統的性役割や婚姻制度を否定するわけではないが性役割内部での矛盾も役割葛藤もあらかじめ回避するという、戦略的ともいえる葛藤処理法を採用している³¹。

このような価値転換も踏まえて、今日の女性が抱いている役割葛藤とその解決法に焦点を当てていきたい。本研究でこれが解明できれば、性役割をめぐる葛藤処理法を模索し続けてきた女性に新たな視座を提供することが可能となるだろう。

注

¹ 「葛藤」には個人内部での葛藤と個人間の葛藤がある（『新社会学辞典』1993: 1067）。本稿で扱うのは、個人内部での葛藤である。女性が抱く2種類の葛藤については妙木忍（2003: 158-9）を参照されたい。

² 第1次主婦論争は、主婦の職場進出を説いた石垣綾子「主婦という第二職業論」（1955）から始まり、主として職場進出論と家庭擁護論の対立が見られた。第2次主婦論争は磯野富士子が「婦人解放論の混迷」（1960）のなかで、主婦のおこなう家事労働の経済的価値を問うたことに対し、経済学者らが家事労働無価値説を唱え、納得のいく説明と結論が出ないまま収束した。第3次主婦論争は、武田京子「主婦こそが解放された人間像」（1972）から始まった。武田は生産労働こそ価値があるというのは産業社会の論理として批判、「したくないことをしなくて、したいことのできる立場を選ぶ」ことは「理屈抜きで、だれもがそうありたいと願う本音のところの人間の生き方」（武田[1972]1982: 149）であ

ると述べ、主婦の生き方を、現代社会に存在する
どの人よりも人間的な生き方である、とした。そ
れに対し、林郁「主婦はまだ未解放である」(1972)
などの反論が寄せられた。

³ アグネス・チャンは1955年8月20日に香港
で生まれ、1969年に歌手としてデビューした。
1972年来日し、「ひなげしの花」が大ヒットする。
1973年9月上智大学国際学部入学、1976年9月
カナダのトロント大学に留学した(社会児童心理
学科を卒業)。1978年に帰国し芸能界に復帰する。
1986年1月元マネージャー金子力氏と結婚、11
月に長男和平(かずへい)君が誕生した。

⁴ 「第4次主婦論争」という名称については、『女性
学辞典』(上野千鶴子担当・井上輝子ほか編2002:
196)の名称に依拠している。

⁵ 「家族国家観」とは、『『家族』と『国』の接合に
より天皇・国家に対する民衆の忠誠を動員・正当
化すること』(牟田和恵1996:81)を指す。

⁶ そして原ひろ子(1979:57)が指摘するように、「夫
がサラリーマンで、妻は内職もせず、夫の俸給だ
けで家事をきりもりしている場合」を、「専業主婦」
とよぶようになった。これは瀬地山(1996:51)の
「主婦」の定義「夫の稼ぎに経済的に依存し、生産
から分離された家事を担う有配偶女性」に限りな
く近い。「専業主婦」という呼び方は、「日本の歴
史のなかで、主婦化の完成とその分解の時期にあ
たる」(上野1994:128)1970年代に誕生し、「主
婦が自らのアイデンティティを問わなければなら
なくなった」(上野1994:128)からこそ生まれた
言葉である。これは戦後30年間下がり続けた女子
労働力率が1975年を底辺に上昇傾向に転じたこと
と密接にかかわっている。

⁷ 1950年代～1980年代の論争で焦点化される「主
婦」が——第2節3項で述べる転換点を経験した
にもかかわらず——家庭内で唯一の、主たる家事
担当者であることは注目されてよい。ただし、「サ

ラリーマン＝専業主婦」体制における「主婦」は、
1950年代～1970年代にライフコース規範であっ
たこと、および、1970年代後半以降は、そのライ
フコース規範が崩れたことは強調されてよい。とい
うのも、職業を持ちながら依然として家事を担当す
る(広義の)働く「主婦」が増加してきたからであ
る。簡潔に述べると、3次にわたる「主婦論争」で
焦点化されたのは職業を持たない「主婦」であり、「ア
グネス論争」で焦点化されたのは職業を持つ「主婦」
であった。

⁸ 総務庁統計局「労働力調査」による。下降傾向は、
1975年を境に上昇傾向に転じた。

⁹ 池田勇人首相(1960～64年首相)の所得倍増計
画なども人口増減の予測をしながら構想を練ったと
いわれている(落合[1994]2001:88)。

¹⁰ 総務庁統計局「労働力調査」による。「専業主婦
世帯が共働き世帯を下回った」というのは、1983
年の有配偶女子の労働力人口比率が51.3%を占め、
半数をこえたことに基づいている。

¹¹ 第3次主婦論争は、専業主婦が減少しはじめる時
代を目前にして、「専業主婦」を選んだ女性の自己
正当化のために闘わされたものである。上野(2003:
264)が指摘しているように、専業主婦であること
が「あたりまえ」でなくなり始めた時代には、「な
ぜ専業主婦を選んだのか」という問いが成立しう
る。そのような中で、主婦たちはその存在意義と正
当性を主張しなければならなくなったのである。そ
の意味において第3次主婦論争は、女性をとりま
く状況が変わりつつあったときに起こった、時代象
徴的な産物だったといえる。

¹² 女性の選択肢の多様化は、なぜ「その」選択肢を
選んだのかという自己証明を女性に迫るものであ
る。女性が自らの意志と計画によって人生の選択肢
を選び取ることができるということは、自分が選択
したライフコース以外にも(選択可能であったが選
択しなかった)選択肢があることを意味している。

¹³ このような職場神聖論に立脚したアグネス批判は、仕事のために家庭や子育てを犠牲にしてきた母親と、働きたくても子育てのために仕事をあきらめざるを得なかった母親の双方から出てきている。このような、女性によるアグネス批判からみえてくるものは、(1)「家事労働は女性が担うものである」という性役割規範の残存であり、このことは(2)「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分担の残存をも意味している。ゆえに(3)働く女性が増加したにもかかわらず、職場では男性並みに働くことが求められ、かつ、家庭では女性的とされる役割を果たすことが求められた。以上の意味において、「公私の分離」規範は、「家事労働は女性が担うものである」という性役割規範と論理上独立のものでありながらも、「アグネス論争」においては、前者は後者を内包していると考えられる。

¹⁴ たとえば、「アグネス論争」直前(1986年)の総務庁生活基本調査の統計からは、「夫の家事時間は、共働きで1日8分、妻が無業の場合は7分と、極端に短いだけでなく、妻の就業形態にもほとんど左右されな」いことが明らかになっている(大沢真理1993:108)。このように、女性の職場進出という社会史的变化があった後も、相変わらず家庭で家事を担うのは女性であったことが統計的にも報告されている。

¹⁵ 収集方法としては、①『「アグネス論争」を読む』JICC出版局論争経過表、②小浜逸郎『男がさばくアグネス論争』(1989)資料一覧表、③大宅壮一文庫雑誌記事索引Web版「WebOYA」で「アグネス・チャン」を検索、「アグネス論争」に関係する記事を選出、④『月刊女性情報』1988年7・9・10月の「子育て論争」欄、同8月の特集「働く女と男の子育て」欄、⑤朝日新聞データベースDNA(Digital News Archives for Libraries)で「アグネス論争」に関する記事を選出、⑥(子連れ出勤の当事者となりうる集団の言説として)「育児・家庭教育」雑誌『ブ

チタンファン』の投稿欄を用いた。「子連れ留学」や第2子以降の派生的な記事は除いた。

¹⁶ 第3次主婦論争においては、主婦を礼賛するという方法によって主婦の立場の正当性を示そうとした。自明性が崩れつつあった主婦の正当化を試みることで自体が、「仕事か家庭か」という二者択一の解体を物語っていると同時に、その時点でも家庭を選択することが礼賛された、という意味においては二者択一論に依拠した論であったといえる。

¹⁷ しかし、江原([1995]2000:52)はその限界についても次のように述べている。「性役割論は、男女間の不平等な社会関係を、家族や職場など具体的な集団や組織における個人の位置に基づく概念である役割として描き出すために、あたかもそれが社会の一部分に過ぎないかのように、そしてその変革がそれ自体として可能であるかのように論じる傾向がある」という。井上(1995:19-20)は性役割概念が少々色褪せたと述べるかわら、その概念が不要になったというわけではないと述べ、その根拠に今なお残る『「男は仕事、女は家事と仕事」という新性別役割分業」や「性役割ステレオタイプ」の根強い残存を指摘する。

¹⁸ 母親という性役割が社会的役割であるのに、「女性ならば当然の役割」とされることによって、「働く女性は家庭役割・母親役割をおろそかにしているのではないか」という罪悪感に苛まれ、逆に主婦は家事労働に従事しながらもそれを『労働』とはみなしえず、『何もせずに』養われていることに引け目を感じさせられてしまう」という事態を江原([1996]2000:23)は指摘する。

¹⁹ 井上(1976:6)が「妻、母、主婦のいずれをとってみても、それを核として女性が一貫した自己の統合性を実現することが困難」と述べているのは、女性に求められる性役割内部での矛盾を示したものである。その上さらに、職業的役割が追加されると、女性はどうのように役割葛藤を解決するのか、という

問いを井上 (1976) は立てたのである。

²⁰ スーザン・ファーの3類型(性役割と政治的役割の葛藤処理方針)のそれぞれについて、井上(1976: 8)は次のような具体的説明とそれに随伴する課題(問題点)とを示している。(1)「伝統化型」の場合—「組織の運動方針や戦術の決定は男性にまかせ、ひたすらおにぎり作りに専念／伝統的な女性の役割を演じることを政治的役割を果たそうとする」、問題点は「他人指向的な妻の役割遂行のアナロジー／女性が確固としたアイデンティティを獲得できない」こと、(2)「使い分け型」—「政治の場では男性とまったく同様な活動をするが、デート中や家庭においては女の役割を演じきる」、問題点は「『引き裂かれた自己』以外の何ものでもない」こと、(3)「統合型」—「政治的な革新思想を私生活にまで貫徹し、新しい男女関係を形成しようとする」、問題点は「革新的逸脱者として、周囲との緊張に常に悩まなければならない」というものである。これらは、スーザン・ファー(1976: 301)の日本女性の3類型—Neotraditionalist(女性役割という一つの役割のみを受け入れる)、New Women(平等性に基づいて、女性役割という一つの役割だけではなく二つ以上の役割を担って社会参加の権利を主張する)、Radical Egalitarians(伝統的性役割と伝統的婚姻を完全に拒否する)—に対応するものと考えられる。

²¹ 言説分析において筆者が注目していることの一つに、時代ごとの言説の変容がある。また、その言説上の変容が時代の文脈に対応していることも論じてきた(第2節3項)。さらに踏み込んだ本節の分析は、それら言説の変容から読み取った、論争の契機や争点が、女性の抱く葛藤を反映するものとして解釈できるであろうという立場を採っている。その意味において、その時代の文脈に応じて言説上問題化される葛藤処理法と問題化されない葛藤処理法とがあるという、その言説のあらわれ方は、注目されてよいだろう。

²² 家電業界は1953年を「電化元年」として本格的に売り込みを開始し、1955年には「三種の神器」(電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビ)が主婦たちの憧れの的になった。

²³ 第2次主婦論争の契機については、上野(1982a: 239)の解釈による。

²⁴ 家庭内での役割のみを重んじる「伝統化型」や、伝統的性役割と婚姻制度を受け入れない「統合型」は、「仕事も家庭も」という新しい女性の生き方とは様相を異にしている。

²⁵ 女性が直面し、ますます顕在化してきた「女性の二重負担」への抵抗の試み—アグネス論争をこのように分析することも可能であろう。それは、「なぜ女性だけが、職場では男並みに働くことを要求され、家庭では女性的とされる役割を担わなければならないのか」という問いや、「なぜ女性だけが相矛盾する役割期待による役割葛藤を抱かなければならないのか」という問いの萌芽的なあらわれであったといえる。

²⁶ と同時に、「百恵型」があまり登場しなかったのは、既に働く女性が増加していたからであろう。すなわち、論争の軸が、働く母親内部での差異に移行したのである。

²⁷ 「相対的剥奪」とは、人びとの抱く不満は社会的境遇の絶対的な低さに起因するのではなく、期待水準と達成水準の相対的な格差から生じるものだとする考え方であり、不満を説明する概念として展開されたものである。

²⁸ 比較が生じるためには、「或る類似性が認知され、想像され」ることが必要である(Merton [1949]1957=1961: 222)。アグネスは、仕事のために家庭や子育てを犠牲にしてきた母親や、働きたくても子育てのために仕事をあきらめざるを得なかった母親の双方にとって(比較の相手としての)「重要な他者」となりうる。なぜなら、アグネスも含めて働く母親が直面する「仕事と子育てのジレンマ」

という共通点があるためである。「最小限この類似性が得られて後に、状況に関連のあるその他の類似点の差異点が評価を形成するための脈絡を提供する」(Merton[1949]1957=1961: 222)ということからも、「働く母親の子連れ出勤」という視点からみれば、アグネスは十分に比較の対象となりえたのである。

²⁹ このように、いずれの葛藤処理法でもやはり問

題点が残されていることが、論争が繰り返される原因であろう。

³⁰ 上野(井上ほか編 2002: 196)にも言及されている通り、落合恵美子、山田昌弘らによる論である。

³¹ この新しいタイプの葛藤処理法は、生じうる葛藤を事前に回避するという意味において「回避型」と呼べるものである。今後の検討課題としたい。

文献

秋庭隆編, [1986]1995, 『日本大百科全書』小学館.

江原由美子, 1995, 「ジェンダーと社会理論」井上俊編『岩波講座社会学 11 ジェンダーの社会学』(再録: 2000, 『フェミニズムのパラドックス』勁草書房, 33-69.)

江原由美子, 1996, 「女性学・フェミニズム・ジェンダー研究」『家計経済研究』32号(再録: 2000, 『フェミニズムのパラドックス』勁草書房, 14-32.)

藤枝濠子, 1985, 「ウーマンリブ」朝日ジャーナル編『女の戦後史——昭和40・50年代』朝日新聞社, 44-51.

原ひろ子, 1979, 「主婦研究のすすめ」岩男寿美子・原ひろ子編『女性学ことはじめ』講談社.(再録: 1995, 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『日本のフェミニズム3 性役割』岩波書店, 57-74.)

平野貴子・神田道子・小林幸一郎・Joanna Liddle, 1980, 「女性の職業生活と性役割」日本社会学会編『亜社会学評論』第30巻4号.(再録: 1995, 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『日本のフェミニズム3 性役割』岩波書店, 179-199.)

池田祥子, [1991]1993, 『女の経済的自立』『主婦』『母』、それぞれの思想をどう超えるか』小倉利丸・大橋由香子編『働く／働かない／フェミニズム』青弓社, 11-31.

井上輝子, 1976, 「役割期待と役割葛藤」『婦人問題懇話会会報 No.25』2-8.(再録: 「女性にたいする役割期待と女性における役割葛藤」『女性学とその周辺』勁草書房, 95-108.)

———, 1995, 「日本の女性学と『性役割』」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『日本のフェミニズム3 性役割』岩波書店, 1-21.

井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編, 2002, 『女性学事典』岩波書店.

神田道子, 1974, 「主婦論争」『講座『家族』』第8巻.(再録: 上野千鶴子編, 1982, 『主婦論争を読むII』214-230.)

小浜逸郎, 1989, 『男がさばくアグネス論争』大和書房.

駒野陽子, 1976, 『主婦論争』再考——性別役割分担意識の克服のために——』『婦人問題懇話会会報』12月刊.(再録: 上野千鶴子編, 1982, 『主婦論争を読むII』231-245.)

Merton, R.K, 1949, *Social Theory and Social Structure*, Free Press.=1961, 森東吾他訳, 『社会理論と社会構造』みすず書房.

- 森岡清美・塩原勉・本間康平編, 1993, 『新社会学辞典』 有斐閣.
- 牟田和恵, 1996, 『戦略としての家族』 新曜社.
- むらき数子, 1977, 「主婦であることへの不安——主婦論争の背景——」 『思想の科学』 5月号, 74-81.
- 妙木忍, 2003, 「比較準拠集団としての女性」 『ソシオロゴス』 第27号, 155-170.
- , 2004, 「女性間の対立と葛藤—『アグネス論争』の言説分析—」 東京大学大学院人文社会系研究科
社会文化研究専攻修士学位論文.
- Oakley, Ann, 1974, Housewife, Deborah Rogers Ltd.=1986, 岡島茅花訳, 『主婦の誕生』 三省堂, 5-16, 195-220.
- 落合恵美子, [1994]2001, 『21世紀家族へ——家族の戦後体制の見方・超え方』 (新版) 有斐閣選書, 49-92.
- 大沢真理, 1993, 「企業中心社会のジェンダー」 『企業中心社会を超えて: 現代日本を『ジェンダー』で読む』
時事通信社, 45-123.
- Pharr, Susan, J., 1976, The Japanese Women: Evolving Views of Life and Role. in Austin, Lewis ed. Japan: The
Paradox of Progress, Yale University Press, 301-327.
- 瀬地山角, 1996, 「第二章 主婦の誕生と変遷」 『東アジアの家長制』 勁草書房, 50-83.
- 瀬川清子, 1979, 「日本女性の百年——主婦の呼称をめぐる——」 岩男寿美子・原ひろ子編『女性学ことはじめ』
講談社, 99-126.
- 総務庁統計局, 1988, 『労働力調査年報』
- 富岡多恵子, 1984, 『藤の衣に麻の衾』 中央公論社.
- 上野千鶴子, 1982a, 「序 原点としての主婦論争」 「解説 主婦の戦後史——主婦論争の時代的背景——」 上野千
鶴子編『主婦論争を読む I』 勁草書房, i-iv, 221-241.
- , 1982b, 「解説 主婦論争を解説する」 上野千鶴子編『主婦論争を読む II』 勁草書房, 246-274.
- , 1985, 「おんな並みでどこが悪い」 『婦人公論』 中央公論社. (再録: [1986]2001, 『女という快楽』
勁草書房, 210-226.)
- , 1991, 「ファミリー・アイデンティティのゆくえ—新しい家族幻想」 『変貌する家族 1 家族の社会史』
岩波書店, 1-39. (再録: [1994]2000, 『近代家族の成立と終焉』 3-42.)
- , 1994, 「日本のリブ—その思想と背景」 『日本のフェミニズム① リブとフェミニズム』 岩波書店,
1-32.
- , 2003, 「女の戦後文化史」 『岩波講座 近代日本の文化史 10 問われる歴史と主体』 岩波書店,
235-277.

(みょうき し のぶ、 東京大学大学院、 myoki@l.u-tokyo.ac.jp)

(査読者 野田恵子ほか1名)

Changes in the solutions to resolve conflicts within the gender roles assigned to women

— Focusing on Housewife Debates from 1950s to 1980s —

MYOKI, Shinobu

The purpose of this paper is to investigate what kind of conflicts women have had and what kind of solutions to them women have adopted with regard to their gender roles. This is examined in the light of the changes in the socio-economic environment surrounding women and the resultant shifts in housewife status. The materials of analysis come from the “Housewife Debates” from 1950s to 1970s and “Agnes Controversy” in 1980s. Although female career builders have been increasing since 1975, a new problem has arisen, namely, role conflict between career and the existing gender role. By adopting discourse analysis, this paper illustrates that the above debates reflect the conflicts of gender roles assigned to women and their solutions, and also clarifies the transition of such solutions.